

秋山和慶 人生は各駅停車で

最終回

オーケストラの本拠地



カナダ・バンクーバーのオルフェウム劇場とその天井画。
写真提供：バンクーバー交響楽団

指揮できたのは、本当に嬉しかったですし、格別の思いでした。

外国のホールでは、1972年から85年まで音楽監督を務めたカナダ・バンクーバー交響楽団の本拠地オルフェウム劇場です。1927年に建てられたいわゆるヴォードヴィル劇場で、老朽化のため取り壊す予定だったのですが、とても音響がよかつたため劇場解体反対運動が起きて、1974年に持ち主からバンクーバー市が買い取り、劇場をすべて元通りにしました。天井画は、当時の画家がロサンゼルスに健在であることがわかり、改修の際、同じ絵を描いてもらったんですよ。50年後にまさか再び天井画を描けるとは思ってもみなかったのでしょう。1977年の改装オープンのとき、画家の方は感激の涙を流していました。

改装後はバンクーバー響のホームグラウンドとして、本番はもちろん、練習もすべてこの劇場で行いました。劇場の賃

賃料は、年間たったの1ドル。さらに市は、劇場の隣りにビルを建て、そこに楽団員用のリハーサルスタジオを作り、町の音楽学校を設立して楽団員が先生を務めました。バンクーバー響は市営ではないのですが、「町のオーケストラ」として市がとても大切にしてくれたのです。オーケストラと町の関係のあり方を教えてくれたオルフェウム劇場は、私の人生のなかで大事なホールです。

1973〜78年に音楽監督を務めたアメリカ交響楽団はニューヨークのカーネギー・ホールが本拠地だったので、50回ほどの舞台で指揮しました。言わずと知れた世界のひのき舞台ですし、私には映画「カーネギーホール」での、ハイフェッツやチャイコフスキーが出てきて……というイメージで、やはり憧れの場所でしたから思い出深いです。

シラキユース交響楽団(アメリカ・ニューヨーク州)の本拠地クライス・ハインズ劇場は、建設の過程におもしろいことが。と

いうのは、予算不足のため天井を低くせざるを得なくなったのですが、それが功を奏して音響のとてもいいホールになりました。怪我の功名ですね。

オーケストラは本拠地のホールで音作りをします。本拠地の音響で、「いい音」を追求し、それが楽団の個性になるのですから、本拠地は本当に大切な場所です。東京交響楽団の本拠地ミュンヘンがよいより、ニューヨークを迎え、今は万感の思いです。極上の音響を誇るミュンヘンから世界に向けて、日本のオーケストラ活動を積極的に発信したいですね。ミュンヘンの新たな進化と発展がとても楽しみです。

今まで世界のさまざまなホールで指揮しましたが、そのなかで特に印象に残っているホールがあります。

私の東京交響楽団とのデビューコンサートは東京文化会館でした。が、その前に日比谷公会堂で何回か振る機会がありました。東京文化会館が建つ前、東京のコンサートホールは日比谷公会堂だけでしたから、私にとって日比谷公会堂は、演奏会を聴くために小さい頃から通っていたホール。憧れの場所であり、雲の上の殿堂でした。そのステージで



秋山和慶 ©川村悦生

1941年生まれ。64年2月に東京交響楽団を指揮してデビューのち音楽監督・常任指揮者を40年間務める。東京交響楽団桂冠指揮者、ミュンヘン・ザクセンホール・チーフアドバイザー。